論　文

アーミッシュの死生観研究

―「創世記」の葬儀の理解をめぐって ―

尾　山　清　仁*

はじめに

死は，われわれが直面する現実の中で最も厳しいものである。しかも，この死という厳しい現実は，その当事者ばかりでなく，取り巻く周囲にとっても大きな脅威となる。しかし，多くの場合，それは突然のように襲って来て，われわれの側に心の備えができていようといまいとに関わらず，有無を言わさず通り過ぎていく。これを逃れ得る者は一人もいない。受容する以外にないのだが，われわれは皆一様に葛藤と苦闘を繰り返す。このことについては，キュブラー・ロスの研究に詳しい(1)。これまでどれだけの死を見て来たとしても，自らの死や愛する者の死と向き合わされる経験は，今までのそれとは全く異質のものであり，われわれはこれに戸惑う。そして，この死は，その後の人生を全く別のものに変えてしまう。これ程絶望的で容赦ない衝撃は他に類を見ない。そんな残酷な仕打ちにもかかわらず，世界は昨日と全く変わらず動いており，人生もまた相変わらず進んで行く。取り残された者たちは，そこで絶望感に打ひしがれつつも，同時に焦燥感と倦怠感を抱きながら，いつか再び自らの足で立ち上がらなければならないというもう一つの現実とも直面しなければならない。こうした二重の意味を持つ厳しい死の現実をわれわれは受け取り，消化していかなければならないのだ。かかる現実に対する対処の仕方は個人により相違があるとしても，その個人を取り巻く社会や文化にはある一定の対処の仕方なり規則性といった習慣が見出される。

本稿では，アーミッシュの社会に見られる葬送の文化を検証してみたい。特に，ここでは聖書「創世記」の葬儀の解釈から彼らの死の現実の受けとめ方を見ていくことにする。

１．死を意識して生きる

死生学の研究者であるマックス・シェラーは，「人間はどの程度まで死を個人的に体験できるか」と自らに問いかけている。そして，人は年を重ねて，多くの同世代を先に天国に送り出してしまうと，現在生きている周囲の人たちとの繋がりを保ちづらくなるという。彼は「他人の生への関わりがうまくできなくなるのは，この他の人の死への強い繋がりによる」(2)と述べ，先に召された者と残された者との絆は，死後も続いていくことを強調している。

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　博士後期課程４年（指導教員　池田雅之）

ドイツを代表する哲学者であり神学者でもあるハイデッガーは，「死とは人間を訪れるひとつの出来事ではなくて，すでに人間がその誕生以来生きてきている事実なのだ」と述べ，「人間は生まれた時からつねに死にのぞんでいる」。「死という基調の上に生まれ，かつ生きている」。「生まれるとすぐ，もう死んでも十分な存在となっている」。「死がわれわれの存在を形づくっている」。「われわれは，毎日毎日，われわれの死を生きている」のであって，人間は本質的に「死に至る存在（Sein-zum-Ende)」であるという。そして，「この死は個人の意識にとって何を意味するのか」とハイデッガーは問い，その答えとして「生を中断することによって，死は生を未完のままに終わらせる。……未完成こそがわが存在の本質なのだ。……死は生がひとつの価値，しかも未完の価値であることあることを教えてくれる」[3]。

この死の常住という問題が，ハイデッガー哲学を支配し，また深遠なものとしている。一方，フランスを代表する実存主義の哲学者サルトルは，反対の見地を示している。「死は原則的にぼくから逃れていくものだ。……死は誕生と同じく純然たる事実なのだ。……われわれが生まれたということが不条理なように，死んでいくこともまた不条理なのだ。その上，われわれはいつも死ぬと来ている」。したがってサルトルにとっては，「生は，それが存在を続けるかぎり，いかなる死にも汚されぬ自由なものだ。なぜなら，ぼくは生きている自分しか考えることができないからだ。人間は生のために作られた存在であって，死のために作られた存在ではない」[4]。

サルトルほどの現実家が，死や有限性を事実として認めようとせず，自ら非現実主義に落ち込んでいるのを見るのは，奇妙に思われるが，かくて，死を前にして二つの基本的な態度があり得るということだ。ハイデッガーはそれを目の前に見据え，サルトルはそれから逃れようとする。この二つの態度がわれわれにとっても取り得る姿勢である。

ハイデッガーの立場は，古代ユダヤ文学の中に現されたモーセの死生観とも一致する。「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも，その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り，私たちも飛び去るのです。それゆえ，私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください」[5]。（詩篇90: 10・12 新改訳）

1－1．日本における状況

こうした自らの死を意識し生きるという姿勢や亡くなった人との関係が今でもリアルに続いているという死生観は，日本近現代思想家たち（池田晶子，上原専禄，井筒俊彦，小林秀雄，柳田國男，鈴木大拙，西田幾多郎，神谷美恵子）の中にも見られるものであり，特に，３・11以降日本において多くの人たちによって認識される死生観であると若松英輔は語っている[6]。

島薗進は，近現代の日本人の死生観について，「宗教は信じないが，良き死には関心がある」と述べ，特定の宗教を信奉していなくても，心で永遠の命を得るとか，死を通して究極の解放に至るという死生観文化が，「1970年代以降の日本の学問，文化，教育の中で死生観への関心が高まってきた」[7]と語る。

島薗は，この書の中で，「『おくりびと』と

二十一世紀初頭の死生観」という章の中で「死に向き合うことの勧め」と題して，人の死と葬送儀礼がもたらす「絆の回復」ということについて触れている。「この映画の背後では父と息子の軋轢と和解という物語，悲しみを超えて癒しの時が訪れる物語の時間が流れている。父の死とツヤ子の死（銭湯のおかみで，息子と最後まで争っていた姿が，主人公と亡くなった母の関係と重なる）という重い犠牲を経て，生への信頼と若い夫婦の絆が回復される」（括弧内は，筆者の補足）。この言葉の中に，葬制文化が本来包含している人間関係における赦しや和解といった親しい者たちとの関係の回復という人生の重要なテーマが扱われていると思われる。

島薗進は，前書の中で，「おくりびと」のもう一歩踏み込んだ解釈として，興味深い見方を与えている。この映画では，「父と子，母と子，そして妻と夫のか細くはかない絆が問題になっている。ハッピーエンドに終わっているようだが，けっしてがっちりとした温かい絆の回復が期待されている訳ではない」。映画の主人公たちが「納棺のために訪れる家族は，濃密な共同体や複雑な人間関係をかいま見せている。だが，主人公たちはどちらかといえば，そうした共同体の外に立っている」。ハッピーエンドというよりも，「むしろこの作品は，厳しい死の表象を媒介とすることで，かろうじて薄くか細い絆への信頼感を呼び覚まそうとしていると見るべきだろう。……この解釈は，現代における死の文化の復興と見られるもの全体の解釈にも関わってくる。個人の信仰によって自己を支える共同性を見いだしにくくなった現代人は，死や喪失を強く意識し，その表象を深く内面化する。そしてそのことによって，はかない個々人の間の絆を保持し，かろうじて我が身の置き場を確保しようと試みている」[8]。

それでは，現代人は，どこにその「我が身の置き場」を確保しようと試みるのだろうか。このことに一つの光を与えてくれる事例として「べてるの家」が挙げられよう。

１－２．ありのままでいられる安全な場

斉藤道雄が，べてるの家で目撃したものについては，『治りませんように』で述べられているが[9]，その本のタイトルからも分かるように，「ただ治そうとする生き方をやめ，病気の中で，それとともに生きることを受け入れるとき，病気は重い荷物から宝へと姿を変える」という生き方を模索する働きだ。「精神障害やアルコール依存などの問題を抱える人々が，共同生活を営むべてるの家では，保護され代弁される存在でしか生きることが許されなかった患者としての生き方を抜け出して，一人ひとりの悩みを，自らの抱える生きづらさを，労苦を語る言葉を取りもどしていくこと」を目指している。

このありのままを受け入れること，未完のままを受け入れるという生き方の中に，現代において我が身の置き場を確保しようと試みる活動の鍵があるのではないか。

脳外科でもあった精神科医で，日本にも何度か来日したことのあるポール・トゥルニエは，対話，特に告白の重要性についてこのように述べている。

> 診察室の中で一対一で向かい合っている時，その人に決定的な瞬間が訪れることがあります。今まで誰にもしゃべったことのない思い出が彼の心に浮かんできたのです。彼はためらい，沈黙し，

大きな苦痛に身悶えします。彼はささやくように言いかけます。「あなたが私のことをどう思われるか分かりませんが……」。そしてついに耐え切れず，抵抗を捨ててしゃべり始めます。深い感動がわれわれを包みます。真実の感動とでもいいましょうか。彼は私の眼をじっと見つめながら言います。「真実を語るってことは何と恐ろしいことでしょう」。私は彼の感動を自分のもののように感じます。「真実を語る勇気を持つ人間は，何と偉大なことでしょう」。勿論，以前にも彼がほんとうのことをいろいろ私に語ったことはあり得ます。しかし，今感じているような感覚はいまだかつてなかったものです。だから，これは新しい誕生のようなものです。人は誰でも一つの真実しか持ち得ません。しかし，その一つ一つの真実に絶対の香りが含まれているのです。……人間は真実を求めつつもまたそれから逃れようとします。いや，人間は真実から逃れながら，またいつも変わらずそれを探し求めることをやめないのです，人は自分を魅惑するものからこそ逃れようとするものです。といって，生きるためにはそれがなければなりません。真実への愛こそ，自己とのあらゆる調和の源泉なのです。これは特にわれわれの内的真実の場合のことです。外的な，客観的，知的真実はわれわれの行動に大きな影響は持ちません。われわれの行動を決定するものは，われわれの自分自身に対する透明さの度合い，つまり，自分自身との一致感の程度なのです(10)。

また，トゥルニエの友人の外科医のところに，身動きのできない老婆が入院していたという。各種の検査を試みたところ，全てが正常であることだったので，彼女を励まし起きるように勧めたが，全く無関心であった。そこで，医師はいつからこのような状態が続いているのかを尋ねると，それは娘が死んだ３年前からだと答え，さらに「それ以来私の人生には何の意味もなくなりました」と続けた。ところが，この外科医も似た経験をしていた。息子を事故で亡くしていたのだ。しかも，この老婆はその息子が亡くなった同じ部屋に入院していた。彼は，そのことを彼女に話すべきか葛藤した。それは外科医がやることではない。しかし，やむにやまれぬ思いに勝てず，彼はそのことを話すことになる。彼によれば，普通でない診察が行なわれ，それは一方通行の問診ではなく，対話であり，医者個人の証言であり，苦痛の告白であった。翌日，老母は身支度を整え，「お世話になりました」と謝辞の言葉とともに決然と立ち上がり退院して行った。止まっていた時計はみごとに動き出したのだった。

これは，生きる意欲を疎外していたものを会話が取り除いた一例だと考えられるが，この会話にはどんな意味や力があったのだろうか。

１－３．アーミッシュに学ぶ

近年，終末期医療，尊厳死やホスピス，看取りの在り方，そして，正しい悼み悲しみといったことの重要性が語られ，さまざまな分野においてその関心が高まっているが，こうした死生学が取り扱う課題は，最近始まったことではなく，人類史のはじめからわれわれの先祖が取り組んできたものである。人類の最大の敵である死をどう捉え，いかにそれを乗り越え，さらなる発展を遂げてきたのかということは，それぞれの文化によって異なっている。しかし，そこには多くの共通項があることも知られている。しかし，この葬送文化を研究することは，その文化や人々を知る上で大きな助けになる。ここでは，アーミッシュの文化が生み出してきた，彼らの葬送の在り方を通して，愛する者の死をどのように扱い，そして受け入れてきたのかを確認したい。アーミッシュの専門家によれば，葬儀とはそもそも亡くなった者のためであるよ

りも，残された者たちのためにあるという[11]。それは，彼らが死というものをどのように受けとめ，それをプロセスし，そして，立ち上がっていったのかということ。その悼み悲しみ方，その死後の理解，その死を通して成し遂げてきたこと，その死の乗りこえ方などについて，葬送儀礼を通して考察していきたい。また，彼らが独自の価値観や世界観を構築してきた背後にある聖書理解にも触れておくことにする。

日本におけるアーミッシュに関する本格的な研究は，その数が限られており，ましてやその死生学研究はほとんど行なわれていないのが現状である。この度の試みは，長年にわたり交友を深めてきたアーミッシュのエイブ・トロイヤー氏と彼の父でもあり，その教区の長老でもあるハリー・トロイヤー氏からの聞き取りの記録をもとにして構築することができた[12]。

2．アーミッシュの「創世記」葬送理解

なぜ，「創世記」なのか。それは，アーミッシュにとって，創世記に登場する族長たち（アブラハム，イサク，ヤコブ，ヨセフ）の放浪の人生の歩みが，彼らの歴史と重なるからだ。アーミッシュの人びととは，ヨーロッパを追われ北米に移住してきた人たちである。その出発点は，宗教改革にまで遡る。彼らが北米に移住しようと決意した時，彼らは単に新たな出発点としてペンシルバニアを目指したのではなく，聖書の教える約束の地を想定していたことは，彼らがその新天新地において命名した町の名前にも現れている。それは約束の地を意味した「ゴーシェン」[13]が少なくない。ゴーシェンとは，もともと創世記に登場する族長ヤコブ（アブラハムの孫）がエジプトに移住した時，息子ヨセフによって割り当てられた肥沃な土地であった。しかし，このゴーシェンの地がヤコブの子孫にとって最終目的の土地であったわけではない。最終的には約束の地，カナンに戻ってくることになるのだが，この約束地をめぐっては歴史上さまざまな紛争が続いている所である。ここでは，その問題を政治宗教的視点から考察することではなく，死生観及びユダヤ人の宗教観の視点から追いつつ，それがアーミッシュにどのような影響を与えて来たのかを考察してみたい。

2－1．サラの死（創世記23: 1-20）

約束の地について示しが与えられていたにもかかわらず，遊牧民の生活を続けていたアブラハムに一つの転機が訪れた。それは，天幕生活から家という定住生活ではなく，墓という形で，はじめて法的に土地の所有権を持つことによってであった。アブラハムの妻，サラの死である。遊牧民には遊牧民の埋葬の仕方があったと思われるが[14]，どうして所定の場所を購入し，墓を構えることにしたのか。そこには，二つの理由が考えられるが，この土地を所有するという部分において，この記事はアーミッシュの歴史と重なるとハリー・トロイヤーはいう。ヨーロッパにおいて，そして北米に移って来てからも，さまざまな迫害のために居住地を転々としなければならなかった彼らにとって土地を所有するということは，われわれには想像できない程の重要性があったようだ。

2－1－1．妻への感謝

第一は，アブラハムが妻サラに強いて来た苦難を思い，せめて満足のいく埋葬の儀をまっと

うしたいと思ったのではないかということである。それは，故郷の習慣に従って行なう葬送儀礼であったと思われる。尾山令仁は「老いた夫が長い間の忠実な妻の死の際になした美しい物語」[15]と説明し，その理由を感謝にあったと述べている。ハリー・トロイヤーによれば，母親の葬儀において，アーミッシュでは，その故人が好んでよく作った料理が，埋葬の後に提供されるという。それは，アーミッシュのソール・フード（Soul Food）と称されるマッシュポテトとソーセージ，パン，チーズであるが，その味付けはその家族によって異なる。女性たちは故人の味付けに近いものを作り，しばしばそこにワインやラム酒も振る舞われる。当然のことであるが，これらの食事はすべて手作りである。また，年配の女性の葬儀においては，しばしばこのサラの葬儀の箇所が引用されるということだ。

さて，この創世記23章においてその土地所有者であったヘテ人との取引の記事が詳しく述べられているところから，族長時代の社会習慣，特に法的な背景を描写することで，この記述の歴史的信憑性を示していると考えられるが，それは，外国人寄留者が土地を所有することがいかに困難なことであり，アブラハムが十分過ぎる額を支払わされたとも考えられる[16]。在留異国人の地位の低さににについて考える時，遊牧民が定住，あるいは墓を所有するということが当時どのような意味があったのかが推測される[17]。これだけの銀を用意することは，裕福なアブラハムにとっても決して容易なことではなかっただろう。しかし，アブラハムにとっては，金銭の問題ではなかったのである。聖書は，「アブラハムは来て，嘆き，泣いた」（創世記23: 2）と述べ，彼の悲しみの深さを描写している。この「嘆き」という言葉であるが，それは「胸を打ち，声を出して悲しむ」という意味である[18]。彼の心の思い，すなわち苦労をかけた妻への申し訳なさと感謝がここに集約されていると考えるのが妥当だろう。

この嘆きについてであるが，アーミッシュの葬儀は静かに執り行われるので，声を上げて泣くということはほとんどない。しかし，エイブ・トロイヤーによれば，やはり母，あるいは妻の死というのは，父系社会であるアーミッシュにおいても特別な感情が吐露される時でもあるという。子どもの死も辛いものであるが，夫や父の死とはまた違った情緒が表現されるものだということだった。

２－１－２．永遠の命への信仰

第二は，アブラハムの信仰から見る視点だ。神学者たちは，「死において族長たちが，もはやさすらい人ではなく，世継ぎであるということの象徴である」[19]といった解釈を施している。どういう意味か。それは，この地上の人生で終わるのではなく，死後も，否，死後にこそ最終の目的地があるという視点である。この観点についても，アーミッシュの伝統は興味深い解釈をしている。彼らは，ここでヘブル人への手紙11章13－16節を引用する。

> これらの人々はみな，信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが，はるかにそれを見て喜び迎え，地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって，自分の故郷を求めていることを示しています。もし，出て来た故郷のことを思っていたのであれば，帰る機会はあったでしょう。しかし，事実，彼らは，

さらにすぐれた故郷，すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ，神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実，神は彼らのために都を用意しておられました。

「これらの人々」とは，アブラハムやサラのことである。彼らはその信仰によって，危機的な試練を何度も乗り切ってきたのだが，彼らが最終的に目指したものは，この地上における楽園や故郷を持つことではなく，この地上では遊牧民としての生活を享受しつつ，最後まで天国への旅人，寄留者として生きることであった。アーミッシュは，葬儀においてこの生き方の重要性を再確認するためにこの箇所を朗読する。

こうした二つの理由がアブラハムの中には存在していたものと考え，アーミッシュはそれに従う。エイブ・トロイヤーによれば，この第二の視点は「ヘブル書」も語るように，アブラハムばかりでなく，族長イサク，ヤコブたちも持っていた信仰であり，誰かの死に接する時，彼らも必ず考えさせられなければならないという。葬式が行われるたびに，いかなる死生観を持っているのかということが問われ，それによって自分がほんとうの天国への旅人であるのかが再強化されていくのだという。

２－１－３．母性への敬意

ただここで，さらにもう一つの視点を加えておく必要がある。それは，アブラハムの視点からではなく，母親を失った息子イサクの母への追悼の視点からである。アーミッシュの死生観について語る場合，しばしば看過されがちなのであるが，エイブ・トロイヤーによれば，アーミッシュは母親の死に関して，深く喪に服す傾向があるという。家族のために自らの人生を犠牲にし，多くの子どもを出産し，黙々と働いて来た母親に対する深い感謝の念が葬儀には現れるという。それゆえ，母サラの死の記述の直後に，イサクの慰めの記事が取り上げられているのは，アーミッシュにとっては理にかなったことであるという。確かに，創世記24章はイサクの結婚に至るまでの話が詳しく記されているのだが，この「イサクの結婚」の記事と知られる24章の最後の言葉は，イサクがこの結婚によって慰めを得たという結びの言葉で結ばれている。すなわち，これが24章の結論だと解釈するのだ。この24章が結婚相手選択に関する詳細な記述を提供しているのは，悲しむイサクを慰める配偶者は神からの直接的介在によるものであって，それは，愛する母を亡くし憔悴し切った息子が立ち上がり再生への道を辿り始めるためのものであったというのだ。このような解釈は，注解書では見当たらないが，文明の利器に頼らず厳しい自然との戦いや一般社会からの迫害の中から生き残って来たアーミッシュにとって，おのずと人生のしわ寄せが母親にいくことは想像に難くない。そんな母の姿を見て来た子どもたちにとって，母親の喪失は乗りこえ難いものがあるのだろう。だからこの聖書解釈は，まさにそんな彼らの一面を感じさせるし，神からの不思議な救いが具体的なかたちで現されることを期待することは，彼らの祈りと再生への道を指し示すことにもなる。

さて，簡単に創世記24章の粗筋を追ってみると，しもべは主人アブラハムから息子イサクの嫁探しという大役を仰せつかり旅立っていく。この旅は神の摂理の御手に支えられ，不思議なかたちでリベカという親族の女性のところへとしもべを導いていき，彼女とその家族の合意を

通常ではあり得ない早さで獲得し，そして，しもべは直ちにリベカを伴って戻って来る。そして，ちょうどしもべがリベカを連れて帰って来るところに，イサクとの初対面の場面が訪れる。それは，以下の通りである。

> そのとき，イサクは，ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていた。彼はネゲブの地に住んでいたのである。イサクは夕暮れ近く，野に散歩に出かけた。彼がふと目を上げ，見ると，らくだが近づいて来た。リベカも目を上げ，イサクを見ると，らくだから降り，そして，しもべに尋ねた。「野を歩いてこちらのほうに，私たちを迎えに来るあの人はだれですか。」しもべは答えた。「あの方が私の主人です。」そこでリベカはベールを取って身をおおった。しもべは自分がしてきたことを残らずイサクに告げた。イサクは，その母サラの天幕にリベカを連れて行き，リベカをめとり，彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した。イサクは，母のなきあと，慰めを得た。（創世記24章62－67節）

この最後の一節にこの結婚が持っていた重要な意味が説明されている。「イサクは，その母サラの天幕にリベカを連れて行き，リベカをめとり，彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した。イサクは，母のなきあと，慰めを得た」。ここで，イサクが妻を母親代わりに考えているといった批判は当たらない。というのは，当時の文化の中で，母の天幕において結婚の儀が行なわれるのが通常であり，この描写は年老いて生まれたイサクと母との特異性について語っているというよりも，父系社会であったにもかかわらず[20]，ヘブルの文化の中にこうした母親の実質的影響力というものを見ることができるところに注目すべきであろう[21]。そして，イサクが母の死によって受けた大きな心の痛手を乗り越えて行くには，やはり母性的慰めがそこには必要だったということだ。そして，結婚という新しい人生のスタートを通して，過去にとどまることなく，前を向き通常の生活に戻っていくことが必要であったことも忘れてはならない。アーミッシュにおける祝福の試金石として，その年に何組の結婚があったかによって測られるというが，この結婚はまさにそんな意味を持っていた。健全な悼み悲しみには，回復と再生を生む可能性がある。

２－２．アブラハムの死（創世記25: 7-11）

アブラハムの死は，カナンに入ってからちょうど百年たった時に起こった。短い箇所なので引用しておこう。創世記25: 7-11。

> 以上は，アブラハムの一生の年で，百七十五年であった。アブラハムは平安な老年を迎え，長寿を全うして息絶えて死に，自分の民に加えられた。彼の子らイサクとイシュマエルは，彼をマクペラのほら穴に葬った。このほら穴は，マムレに面するヘテ人ツォハルの子エフロンの畑地の中にあった。この畑地はアブラハムがヘテ人たちから買ったもので，そこにアブラハムと妻サラとが葬られたのである。アブラハムの死後，神は彼の子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラハイ・ロイの近くに住みついた。

２－２－１．死後も家族の中に生き続ける

この記述の中で，興味深いことは，第一にアブラハムの人生は実に充実し満たされた人生であったということだ。「天寿を全うし」とあるが，直訳すると，「年をとり，満ち足りて（堪能して）」の意である。それは，単に「年が満ちて」ではなく，「神がその人のために計画されたことの成就」（フォンラート）であり，すなわち，神がアブラハムのために計画されたことが，一つも違うことなく行なわれたというこ

とである。それは，祝福の人生以外の何ものでない。８節では「死に，自分の民に加えられた」とあるが，直訳すると，「近い繋がりの人たちに」という意味になり，その重点は「死後もなお生き存在し続けている人たち」（キドナー）ということである[22]。これは，後世に影響を残していったということであり，残された家族や親しい友人たちの心に大いなる精神的，かつ霊的遺産を残していったかということを伺い知ることができる。内村鑑三が『後世最大の遺物』の中で語っていることと似ている。これが，聖書が語る祝福された人生である。「信仰の父」と呼ばれているアブラハムの死において，生存中の政治的経済的影響力もさることながら，死後もなお人々の記憶の中に残り，尊敬と感謝の思いが子々孫々にまで引き継がれていくことそこ，天寿を全うするということの本当の意義ではないだろうか。

アーミッシュの教育では，後世への影響力ということが現世における成功よりも遥かに重要視される。アブラハムとサラの人生は，アーミッシュの社会では手本とされ，しばしば礼拝においても強調される説教である。そして，この老人の経験が尊ばれることは，単に教えとしてではなく，実際に確認されることである。というのは，筆者がハリー・トロイヤーへのインタビューを行なっている時にはいつでも，子どもたちも傍らにいて，長老である彼の話に真剣に耳を傾けていた。

２－２－２．家族を繋ぐ墓の存在

第二に，サラのために用意した墓は，家族の墓となったということだ（イサク，リベカ，レア，ヤコブ）[23]。しかも，この墓は，単に家族墓だけでなく，イスラエル民族の心の故郷になっていくのだが，ここに墓というものの重要性を見ることができる。日本の文化において，実際に葬られた場所とは異なった場所に墓が建てられる場合があるとしても[24]，故人が葬られ，そのことを思い起こし記念をする場所は，残された者たちにとって永遠に思いを馳せさせる重要な場所となる。聖書から見えて来るヘブル人の墓の特徴は，家族が何世代にもわたって葬ることのできる大きさを持ち，幾つかの部屋に分かれているものや棚がある[25]。それは，一族の繋がりを意味するとともに，その共同体を強化する機能を持っていると考えられる。

アーミッシュも家族ごとに埋葬される。ただ，彼らは，自らのコミュニティを一つの大きな家族であると認識しているので，「○×家の墓」というような考え方も表示もない。実際，プラッツバーグ教区の共同墓地には墓石や印さえもなかった。墓場であることは認識で来ても，区画整理がされているわけではない。次に掘る場所は分っても，これまでにどこに誰が埋葬されているのがほとんど識別できないのには驚いた。その理由を尋ねると，もう魂は天国に行っているので，ここに来る必要はないという。彼らは墓参りをしないのだ。それは，彼らの徹底した復活信仰から来ている。しかし，そのコミュニティのメンバー以外は，その墓地に埋葬されることはない特別な場所である。たとえ墓参りも，花を飾ることもしないとしても，墓地に向かう道は，共同体一人一人にとって，特別な意味を持っており，そこには共同体としての明確な繋がりがあることは否定できない。

２－２－３．残された家族の和解

そして，第三に，もう一つここで注目すべき出来事がある。それは，それまで仲違いをしていた腹違いの兄弟，イサクとイシマエルとが父アブラハムの葬儀を協同して行なっているということである。「彼の子らイサクとイシュマエルは，彼をマクペラのほら穴に葬った」。この墓こそサラのためにアブラハムが用意したものであり，今後この墓が族長，そして，イスラエル民族の聖地となって発展していくことになる。ロイポルトによれば，父の死が二人の間に和解をもたらした可能性を暗示する(26)。実は，この赦しと和解のテーマは，聖書の描写する葬送儀礼の中心として明確にわれわれの目に現れて来る。創世記には，サラやアブラハムをはじめ，全部で七つの葬儀の様子について記述している。本稿では，紙面の都合上，その中の最初の三つのみに触れるが，それらは，デボラ，ラケル，イサク，ヤコブ，そしてヨセフである。こうした葬儀において共通のテーマとして繰り返されてくるのが，この和解であり，赦しなのだ。この一貫したテーマをさらに追っていくことにしよう。このことは，改めて述べるところであるが，アーミッシュ共同体にとっても非常に重要な意味を持つ部分である。アーミッシュの葬儀の一つの目的に，残された者たちの間の赦しと和解があるということは強調してもし過ぎることはない。

２－３．デボラの死（創世記35: 8）

デボラとは誰か。デボラとは，イサクの妻リベカのうばであったと考えられる（創世記24: 59）。創世記35: 8 には，唐突に次のような描写が現れる。「リベカのうばデボラは死に，ベテルの下手にある樫の木の下に葬られた。それでその木の名はアロン・バクテと呼ばれた」。

２－３－１．悼み悲しみの場としての葬儀

エリコットによれば，ヤコブは，兄との衝突のゆえ，母リベカの実家に逃れ二十一年にわたる逃亡生活を終えて，故郷パダン・アラムに帰ってくると，まずヘブロンの父イサクのもとへ行ったという(27)。ところが，母リベカは既に他界していた。溺愛ともいえる深い愛情を持って育てられてヤコブにとって，家庭の事情で離れて生活することを余儀なくされ，その結果，この地上での再会の夢さえも果たし得なかったことは，悔やんでも悔やみきれないものだったに違いない。そこで，ヤコブが失意の中でとった行動は，リベカのうばであったデボラを伴ってヘブロンを去ることであった。ヤコブにとってデボラは，母の形見のような存在であったのだろう。そんな彼女が亡くなるという記事が唐突のように現れるのは，そのような背景があったからと推察される。その葬りの場所は，「アロン・バクテ」と呼ばれたとあるが，その意味は「嘆きの木」という意味だ。この「嘆き」と訳された言葉は，「泣く（ボキテ）」と同根のことばであるから，ヤコブの悲しみがいかに深いものであったのかがわかる。それは母リベカへの思いと重なっていたことは明らかであるが，愛された息子がその成長の姿を見せることのできなかった悔しさを感じさせる場面ではないか。

２－３－２．反省を促す機会としての葬儀

この箇所に関して，アーミッシュの解釈は非常に興味深い。ハリー・トロイヤーによれば，

ここで聖書が語っていることは，母への感謝と共に，しばしば十分その思いを告げることのできなかった無念の涙が錯綜しているそんなヤコブの姿の中に，アーミッシュ共同体を去った者が葬儀に参列する場合，これまでの親に対する親不孝を反省する機会を与え，またこの死の痛みを通して，共同体に再加入する機会を提供するものだという。これは，われわれの聖書解釈とは全く異なっているが，それだからといって誤りであるということはできない。ここで，この無念の思いは，母だけに限らず父への場合もあるという。アーミッシュにとって葬儀自体が，共同体の求心力を強化するものであると同時に，教育的機能も持っていることが分る。

聖書が書かれた時代は，男性優位の社会であり，しばしば男性の視点で記されているが，この母の死に現される激しい情緒は父の死（アブラハムにもイサクにも）には見られない。イサクも母サラを失った後，妻リベカによってここの慰めと支えとを得たことが記されていたように，母親が亡くなると家族を繋ぎ留めていた絆は弱化されていくようだ。このことは，厳格な父系社会であるアーミッシュ共同体においても同じであるとエイブ・トロイヤーは語っている。それは，われわれの文化においても同様で，母が存命である限り，正月に集まるけれども，母が他界した途端，集合しなくなる家族の話はよく聞く。また，母サラの墓に一族が続いて入っていくというこの順番も見逃してはならない。こうした目には見えないけれども母の担って来た人を繋ぎ留める役割，その思いやり，配慮といったものは，人が生きていく上で欠かすことのできないものである。こうしたことに機会のあるごとに感謝を現すことは，聖書が大切な教えとして示すものだとハリー・トロイヤーは語る。

ヘブルの文化において母性がしばしば神の属性を表すために用いられている。ヘブル語には母の母胎を表す言葉が幾つかあるが，「רחם ドタン」はその一つだが，全地を包み込む大地を意味する言葉になり，そこから全てを包み込む包容力を意味する言葉となり，その包容力は「平安」という意味へと発展していったし，「רחם カーファル」も母の母胎を現わす言葉から派生し，「包む」という意味であったが，全ての咎や罪覆い隠すというところから「赦す」，「あがなう」，あるいは「愛する」という意味に変容していった[29]。日本においても母に対する感情には深いものがあるが，こうした母との別れにおいて，イサクやヤコブがしたように，心からの感謝と悼み悲しむことは重要である。こうした過程を通して次への人生のステップを踏み出す力や意味を見出していくのだ。

おわりに

アーミッシュの葬送儀礼における幾つかの特徴を旧約聖書，創世記の解釈と実践から見てみた。創世記には，全部で７つの葬送の儀礼についての記事があるが，ここではその中の最初の３つを取り上げた。そこで見えて来たものは，西洋の哲学者たちが主張し，また，今日の日本の思想家たちの間にも見られる「死を意識して生きること」や「死者は死後も語り続けていること」，あるいは「共同体の絆や準拠集団を必要としていること」，そして，「和解」といったテーマは，アーミッシュの葬儀において中心的な位置を占めているということだ。アーミッシュ共同体において，特徴的に挙

げられることとしては，第一に，父系社会であるにもかかわらず，妻や母への感謝ということが重要なエートスとして守られていた。これは，Worldview分析における「支配的テーマ（Dominant Theme）」と「対抗テーマ（Counter Theme）」として，アーミッシュの考察に援用できる。第二に，天国信仰が挙げられる。この地上生涯が全てではなく永遠の神の国への旅路を生きるという世界観がアーミッシュの生活には一貫してみられる。第三に，和解の重要性である。それは，家族間における和解ばかりでなく，共同体を去って行った者たちが戻ってくる機会としても機能していた。そして，第四に，一つの場所に葬られることの意義は，共同体の絆の強化と再生のために重要な意義を持っていた。以上のことから，アーミッシュの葬儀が共同体の信仰，絆，発展のためにかくも重要な役割を演じていることが分る。これらのことは，われわれも鑑みるべき価値ある視点であり，また，さらなる研究が進められる必要があると思う。

〔投稿受理日2016. 4. 23／掲載決定日2016. 6. 1〕

注

⑴　キュブラー・ロス『死ぬ瞬間の対話』（読売新聞社　1975　p39-64）の中で，患者が死を受け入れ死に至るまでに５つの段階があるという。第一が否認と隔離，第二が怒り，第三が取引，第四が抑うつ，そして，第五が受容。

⑵　シェーラー著作集６『人間における永遠なるもの 上』白水社　1977　p296

⑶　マルティン・ハイデッガー『存在と時間　下』岩波文庫　1960　p59

⑷　ジャン＝ポール・サルトル『存在と無　Ⅲ』ちくま学芸文庫　2007　p289

⑸　詩篇90: 10・12　新改訳聖書　いのちのことば社　1972

⑹　若松英輔『魂にふれる　大震災と，生きている死者』トランスビュー　2012　この書の中で，以上の知識人たちが，死後も彼らの中に影響を及ぼし続ける死者たちの存在について叙述する。

⑺　島薗進『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版　2012　p48，p46

⑻　島薗進『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版　2012　p38

⑼　斉藤道雄『治りませんように』みすず書房　2010

⑽　ポール・トゥルニエ「老いの意味」ヨルダン社　1975　p87

⑾　Bryer, Kathleen B. “*The Amish Way of Death: A Study of Family Support Systems.*” American Psychologist 34, no. 3: 255-61. 1979

⑿　筆者が1990年８月以降，毎年行なってきたニューヨーク州プラッツバーグ市に居住するアーミッシュ「パラティン」集落に関するフィールドワークによる。

⒀　創世記46章28節以降に記されているヤコブとその一族のエジプト移住の地として，ゴーシェン，あるはゴシェンがヨセフによって指定された。ゴーシェンは，カナンの地に似た家畜を飼育するのにエジプトでは一番適していた。

⒁　チベットなどの遊牧民の間では，鳥葬がしばしば行なわれる葬送文化である。

⒂　尾山令仁『創世記』羊群社　1975　p323

⒃　Speiser, E. A. “*Genesis*（*The Anchor Bible*）,” Doubleday & Co., 1964　北シリヤの幾つかの村全体の売却価格が，百シェケルから千シェケルという記録を挙げている。それゆえ，ほら穴を含む畑地が四百シェケルというのは驚くべき高額と言える。聖書では，オムリはサマリヤの丘を，このマクペラよりも小さくないと思われるが，わずか十七シェケルで購入している（エレミヤ書32: 9）。

⒄　申命記24章17節，申命記27章19節

⒅　Leupold, H. C. “*Exposition of Genesis,*” Wartburg Press, 1942 p323

⒆　G・フォン・ラート『旧約聖書の様式史研究』日本基督教団出版局　1969　p120

⒇　女性側の家庭において結婚の許可を与えるのは，父親と長男であった。（“*Archaeological Study Bible*” NIV Zondervan 2005）

(21)　Opler, Morris E. “Theme as Dynamic Forces in Culture.” American Anthropologist of Sociology 51: 198-206（1945）において，文化に支配的Worldview

Themeの存在とととともに対抗的テーマ（Counter Theme）の存在も把握していてた。

(22) Kidner, D. "*Genesis: An Introduction and Commentary,*" Tyndale Press 1967 p128

(23) 創世記49: 31

(24) 両墓制とよぶ。

(25) 『聖書辞典』いのちのことば社 1961 p389

(26) Leupold, H. C. "*Exposition of Genesis,*" Wartburg Press, 1942 p333

(27) Eichrodt, W. "*Theology of the Old Testament*（*English translation*）." Vol. 1. SCM Press, 1961 p221

(28) "*Langenscheidt Hebrew Dictionary*"（Hebrew English）Holder & Stoughton p102

参考文献

阿内正弘［1995］『マックス・シェラーの時代と思想』春秋社

五十嵐靖彦［1999］『愛と知の哲学　マックッシェラー研究論論集』花伝社

池田智［2009］『アーミッシュの人びと』二玄社

池田雅之［1989］『複眼の比較文化　内と外から眺めたニッポン像』成文堂

池田雅之［1999］『想像力の比較文学　フォークロアー・ジャポニズム・モダニズム』成文堂

梅原猛［1993］『日本人の「あの世」観』中公公論社

グレンジャー・E・ウェストバーグ／水澤都加佐訳［2007］『すばらしい悲しみ』地引網出版

大井玄［2005］『いのちをもてなす』みすず書房

大嶋仁［2010］『日本人の世界観』中公叢書

尾山令仁［1975］『創世記』羊群社

片山一道［2015］『骨が語る日本人の歴史』筑摩書房

加藤修一［1977］『日本人の死生観　上下』岩波新書

C・クラックホーン／外山滋比古訳［1971］『文化人類学の世界』講談社

クレイビル・B・ドナルド／杉原利治訳［1996］『アーミッシュの謎』論創社

クレイビル・B・ドナルド［2008］『アーミッシュの赦し』亜紀書房

クレイビル・B・ドナルド［2009］『アーミッシュの昨日，今日，明日』論創社

斉藤道雄［2010］『治りませぬように』みすず書房

坂井信生［1973］『アーミッシュ文化と社会』ヨルダン社

坂井信生［1977］『アーミッシュ研究』教文館

榊原巌［1972］『アナバプテスト派古典時代の歴史的研究』平凡社

榊原巌［1967］『殉教と亡命　フッタライトの四百五十年』平凡社

相良亨［1984］『日本人の死生観』ぺりかん社

ジャン＝ポール・サルトル［2007］『存在と無』ちくま学芸文庫

マックス・シェラー［1977］シェーラー著作集６『人間における永遠なるもの　上』白水社

島薗進［2008］『死生学１』東京大学出版

島薗進［2012］『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版

新谷尚紀［1986］『生と死の民俗史』木耳社

新谷尚紀［1996］『寅さんの民俗学』海鳴社

新谷尚紀［2003］『「お葬式」の日本史』青春出版社

新谷尚紀［2009］『お葬式　死と慰霊の日本史』吉川弘文館

新谷尚紀［2015］『葬式は誰がするのか　葬儀の変遷史』吉川弘文館

菅原千代志［1997］『アーミッシュ　もう一つのアメリカ』丸善ブックッス

清野勝男子［2011］『キリスト教葬制文化を求めて聖書的通過儀礼の理論と実践』IPC出版

竹沢尚一郎［2007］『人類学的思考の歴史』世界思想社

アルフォンス・デーケン［2011］『新版 死とどう向き合うか』NHK出版

アルフォンス・デーケン［1995］『新しい死の文化をめざして』春秋社

アルフォンス・デーケン［1995］『人間性の価値を求めて』春秋社

ポール・トゥルニエ［1975］『老いの意味』ヨルダン社

ポール・トゥルニエ［1975］『老いの意味』ヨルダン社

マルティン・ハイデッガー［1960］『存在と時間』岩波文庫

樋口和彦［1985］『生と死の教育』創元社

ロバート・フルトン編／斎藤武訳［1984］『デス・エデュケーション』現代出版

ヴィクター・フランクル／諸富祥彦［1999］『生きる意味を求めて』春秋社

G・フォン・ラート［1969］『旧約聖書の様式史研究』日本基督教団出版局

レイモンド・A・ムーディ Jr.［1989］『かいまみた死後の世界』評論社
ポール・リクール［2010］『死ぬまで生き生きと』新教出版
エリザベス・キュブラー・ロス［1971］『死ぬ瞬間 死に行く人との対話』読売新聞社
エリザベス・キュブラー・ロス／上野圭一訳［2005］『ライフ・レッスン』角川文庫
エリザベス・キュブラー・ロス／上野圭一訳［1998］『人生は廻るわのように』角川文庫
山折哲雄［2002］『死の民俗学』岩波書店
山折哲雄［2008］『日本人の死はどこへ行ったのか』朝日新書
若松英輔［2012］『魂にふれる　大震災と，生きている死者』トランスビュー
Bryer, Kathleen B.“*The Amish Way of Death: A Study of Family Support Systems.*”American Psychologist 34, no. 3: 255-61. 1979.
Eichrodt, W.［1961］“*Theology of the Old Testament*（*English translation*）.”Vol. 1. SCM Press
Hebert G. Paul［2008］“*Transforming WorldViews An Anthropological Understanding of How People Change*”Baker Academic
Hostetler, A. John［1993］“Amish Society”Johns Hopkins University Press
Hostetler, A. John［1971］“*Chiildren in Amish Society Socialization and Community Education*”Holt, Rinehart and Winston, Inc.
Morris E. Opler［1945］“*Theme as Dynamic Forces in Culture.*”American Anthropologist of Sociology 51: 198-206
Leupold, H. C.［1942］“*Exposition of Genesis,*”Wartburg Press
Robertson, O. Palmer［1982］“*The Christ of the Covenants*”Presbyterian and Reformed Publishing Co.
Shaw, R. Daniel［2003］“*Communication God's Word in a Complex World*”
Stutzman, R. Ervin［2001］“*Tobias of the Amish*”Herald Press
Wagler, Ira［2011］“*Growing us Amish*”Tyndale
Wright, N. T［2008］“*Surprised by Hope*”Harper One

参考資料

宗教思想研究会編［1972］『日本人の死生観』大蔵出版
『聖書辞典』［1961］いのちのことば社
Thieleman J. van Braght“*Martyrs Mirror*”Herald Press